三斎流
九曜会だより

発　行
三斎流九曜会
会長　小林祥泰
事務局　出雲市今市町53

流祖三斎公三百七十年遠忌
法要・献茶式並びに記念茶会
―出雲市にて開催―

法要・献茶式
期日　平成二十六年十一月十五日
会場　ニューウェルシティ出雲

記念茶会
期日　平成二十六年十一月十六日
会場　観翠庵道場・観音寺書院
　　ホテル武志山荘

流祖三斎公の遠忌を初めて出雲の地で執り行う

◇法要・献茶式

平成二十六年は、流祖三斎公の没後三百七十年を迎えることとなり当代細川護熙様の御尊慮を得て出雲の地に於いて、三斎公の御慈徳を偲んで三百七十年遠忌の法要が厳粛かつ盛大に開催された。

遠忌は、今迄十年ごとに東京、京都、熊本など細川家ゆかりの地で行われてきたが、三斎流家元の止住の地、出雲市で開催されるのは初めてのことである。

平成二十六年十一月十五日、ニューウェルシティ出雲を会場として、細川護熙様・護光様を始め河野太通老大師を御導師に迎え、外来の特別来賓と溝口島根県知事等の地元来賓の御臨席を得て、また多くの九曜会員の出席によって厳粛かつ盛大に遠忌法要は営まれた。

○開式のことば
○御入場　御当主　細川護熙様
　細川護光様
○御入場　御導師様方並びに
　御家元様
○献茶
○読経
○焼香　御当主　細川護熙様
　中宮寺御門跡日野西光尊様
○閉式のことば
○挨拶　三斎流家元　森山宗浦
○特別来賓紹介
　細川家御当主　細川護熙様
　細川護光様
　中宮寺御門跡　日野西光尊様
　全国仏教会会長　元妙心寺
　管長　河野太通老大師様
　姫路長晶寺御住職
　多津大無和尚様
○御挨拶　御導師　河野太通様
○御退場　御導師様方並びに
　御家元様
○御退場　細川護熙様
　細川護光様

以上の様に、遠忌法要は粛々と執り行われ、参会者一同改めて、流祖三斎公の御遺徳を偲び、流派の更なる発展を祈念して合掌したのであった。

遠忌法要の会場

◇夕食会

法要後は、直ちに会場を移動して、和やかな夕食会となった。

○開会のことば
○御入場　細川護熙様
　細川護光様
○来賓御挨拶
　島根県知事　溝口善兵衛様
○乾杯
　細川家御当主　細川護熙様
○来賓紹介
　出雲国造　北島建孝様
　出雲大社宮司千家尊祐様代理
　権禰宜　川谷誠一様
　一畑寺管長　飯塚大幸様
　観音寺住職　朝山一玄様
　参議院議員　青木一彦様
　島根県知事　溝口善兵衛様
　出雲市長　長岡秀人様
　島根県議会議員
　佐々木雄三様
　JA島根中央会会長
　萬代宣雄様

細川護熙様　乾杯のご発声

㈱田部代表社長　田部真孝様
島根県茶道連盟会長
　山根常正様
出雲商工会議所会頭
　三吉庸善様
出雲商工会議所顧問
　江田小鷹様
出雲文化伝承館名誉館長
　藤間　亨様
出雲文化伝承館館長
　青木　博様
出雲民芸館館長　山本茂生様
今岡美術館館長　今岡余一郎様
表千家流島根県支部長
　板倉靖雄様
不味流代表　梶谷文子様
遠藤家代表　遠藤充子様
家元御両親　村瀬宗又ご夫妻様
○特別参加(茶席担当)紹介
京都　翠尚会御一同様
東京　翠尚会御一同様
岐阜　聴雨会御一同様
○音楽演奏　出雲楽友協会有志
○夕食会
○祝品贈呈
　今年、喜寿をお迎えになられた細川護熙様へ、九曜会から祝詞と記念品が贈られた。
○謝辞　九曜会会長　小林祥泰
○御退場　細川護熙様
　細川護光様
　中宮寺御門跡　日野西光尊様
○閉会のことば
　厳そかで静かな法要と和やかで賑やかな夕食会の雰囲気が異なる二つの会場が、別々に設定されており、参会者はそれぞれの場で雰囲気を味わって感動し、改めて流派の隆盛発展を祈ったのである。
　今回は、特に細川護熙様の喜寿のお祝いと重なって夕食会では、賑やかさが増し、また東京・岐阜・京都の会友が応援に来雲して交流の輪が広がり、各卓では一段と歓談が弾んだ。
　参会者が多数のため、会場をニューウェルシティ出雲で開催することとなったが、雰囲気の異なる会場の設営と会場移動が敏速かつ効率的に行うことができ好評であった。しかし、会場の都合上参会者を制限せざるを得なかったのは残念であった。
　流祖の遠忌開催は、出雲の地では初めてであり、三斎流への理解と期待が県民の皆様に一段と深まったことかと、関係者一同は喜んだ次第である。

◇遠忌記念茶会

　法要の翌日、十一月十六日、菊花薫る秋晴れのもと、記念茶会が五会場に分かれて開催され、多くの招待者・会員及び市民の参加を得て、各席ともに賑った。
○茶席会場
・総受付　ホテル武志山荘一階
案内・会記、記念品配付
・濃茶席　観翠庵道場
　担　当　観翠庵
・薄茶席　観音寺書院
　担　当　京都・東京 翠尚会
・薄茶席　ホテル武志山荘二階
　担　当　岐阜 聴雨会
・立礼席　ホテル武志山荘三階
　担　当　さくら会
・点心席　ホテル武志山荘三階
　担　当　九曜会

　今回は、特に薄茶席の二会場は東京と京都の翠尚会と岐阜の聴雨会の皆様の御好意による応援の添釜で、元気に満ち誠意あふれる御奉仕の姿に関係者一同感激し、心から感謝した次第である。
　観翠庵道場と観音寺、ホテル武志山荘の各会場への移動に、かなり気をつかったが、移動バスの時刻表や誘導係等の効率的な運用によって無事に移動ができ安堵したのであった。
　流祖三斎公三百七十年遠忌の法要並びに記念茶会が家元止住の地である出雲に於いて、初めて開催されたことは、日頃三斎流茶道の修業に励む関係者にとって大きな喜びとなり、流派の振興発展への力強いエネルギーとなったかと思っている。

茶の湯と禅
―茶禅一味―

和田 貞夫

◆茶禅一味の成立

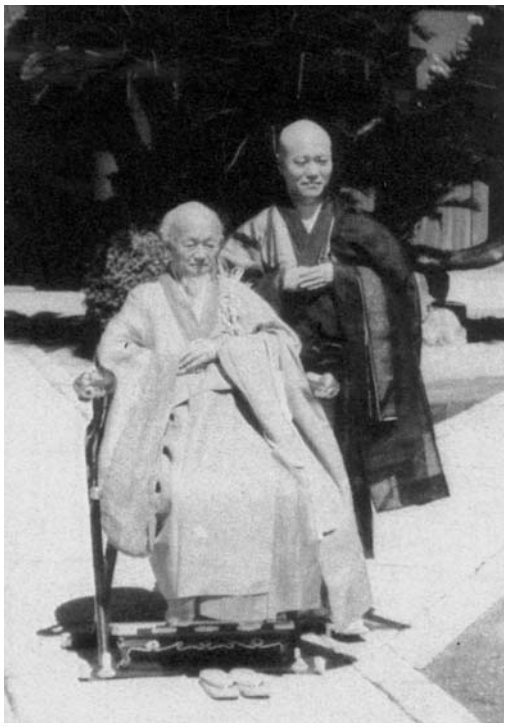
茶禅一味ということばがあるが茶道と禅道は、その本体は同じであるという説である。

喫茶の習慣は、平安時代の中頃から流行したが、鎌倉時代に栄西が再輸入して定着し、いろいろな喫茶の方式が定着した。これらの諸方式を統合し、わびを理念とする茶の湯を大成したのが室町時代中期の村田珠光である。

珠光は一休宗純のもとに参禅し、そこで体得した禅の精神を茶の湯の方式の統合の基本理念としたのであった。

その後、茶の湯が大徳寺の禅と密接に結びついて興隆し、茶禅一味の思想は、次第に発展していった。山上宗二記においては、「茶湯ハ禅宗ヨリ出タルニ依テ、僧ノ行ヲ専ニスル也、珠光・紹鷗皆禅宗也」と説かれており、「茶湯ハ禅宗也」との表現さえある。

また、南方録でも「宗易は、禅法を眼とす。」利休の教えとして「茶の湯は第一、仏法を以て修行得道する事也」と記されている。



山田無文老大師と宗瑞宗匠

利休の孫の千宗旦は、茶の道について問われると、「茶の道は、本来禅によるが故に禅と同じく、さらに示すべき道なし」と答えたと言われており、茶禅一味の思想は珠光―紹鷗―利休―宗旦と経過するにしたがって次第に明確なものとなっていった。

ついに一八二八年刊行の禅茶録にいたって「茶意は即ち禅意也、故に禅意をおきて外に茶意なく、禅意を知らざれば茶意も知られず」とはっきりと説かれ、茶禅一味の説は江戸時代中期に至って茶の湯は単なる趣味や遊びであってはならず、厳しい修行の道の茶道でなければならないとの自覚が茶人達の間に深まり明確に成立したのである。

◆観翠庵と禅

茶道三斎流家元の歴代宗匠も、茶の湯の修行に研鑽を深めながら仏法の道、禅の修行に取り組み、茶禅一味の探求に励み精進されたのであった。

三斎流十八代（観翠庵一世）祥山宗匠は、細川三斎公の墓所である京都大徳寺高桐院に数年間止宿して都の茶湯の研究に取り組むとともに、禅の修行にも研鑽を深められたのである。

十九代（観翠庵二世）祥峰宗瑞宗匠は、道統継承の責任を深く感じ取り、神戸祥福寺僧堂へ掛塔することを決心し、元妙心寺管長の山田無文老大師から得度を受け、雲水となって修行を積み重ね、無垢の法衣と安名（号）を授かられた。師の宗瑞宗匠から厳しい難行の様子を聞いて弟子の筆者達は、師の修行の道を体得すべく神戸祥福寺僧堂を訪ね、東司〈とうす〉（便所）の水で渇きをしのぎながら面壁座禅を行なった難行の跡などを拝見して痛く感動したことがある。

二十代（観翠庵三世）観庵宗育宗匠は、元花園大学学長で神戸祥福寺管長の河野太通老大師より安名（号）を拝受、危逝した先代宗匠の後を継承し流派の発展に努められた。

また二十一代（観翠庵四世）斗南宗浦宗匠は、京都建仁寺管長の小堀泰厳老大師から得度、建仁寺に参禅、厳しい雲水の修行を積まれ、京都において茶道・禅道ともに研鑽を深められたのである。

観翠庵家元の歴代宗匠は、いずれも京都の茶風と禅道の研鑽に励まれ、茶禅一味の道を歩み、流派の興隆に精進されたのであった。

◆荒井一掌と禅

出雲へ茶道三斎流を伝えたのは本名を三郎兵衛、号を古帆・宗音・三陀とする学徳ともに備わった江戸を代表する茶匠の荒井一掌である。一掌は、江戸青山で商家を営む人であったが、武家の血を受けており、若い時には柔術や弓道に励み、三斎流を幕府茶道であった志村三栄に学び真台子を授けられている。三栄は、旗本出身で白隠禅師について参学、「茶道伝心録」を著している。

一掌は、師と同様に禅学修業の必要を感じ、駿河国の松陰寺の白隠禅師のもとに参学する。

白隠は、「駿河には過ぎたるものが二つあり、富士のお山に白隠禅師」と言われた臨済宗中興の祖で、京都で活躍したあと故郷へ帰り、育った沼津の寺の住職となった禅僧である。

一掌は、江戸を離れるにあたって所有する金子を三分し、一を弟へ、一を手切金として妻へ与え、残りの一を持って松陰寺へ行き入門、九年間の長きにわたって禅の修行に励んだ。

やがて修行を終え、松陰寺を去るに当たって白隠から手のひらに一の字を与えられ、これより一掌と名のったという。入門の時に所持金を寺へ寄付しようとして師に一喝され、去る時も同様で仕方なく村へ寄付し無一文となって江戸へ帰ったのであった。

江戸では、別れたはずの妻が再婚せずに与えた金もそのままに、一掌の帰りを待っていた。一掌は

妻に感謝し、その金で庵を建て閑市庵と名付けて三斎流の指導普及に努めたのである。

松平不昧公は、「一掌は事の外大先生の様に被存候」と有澤能登へ一掌は茶道の大先生であると伝えているが、家臣の林久嘉、鳥井又右衛門、矢島半兵衛等に一掌について学ぶように奨励している。

矢島半兵衛は、松江藩の馬術師範であったが壮年を過ぎると師範を辞し、一掌に茶の湯を学んだ。彼は、次のような師の想い出話をよく聞かせたという。

「師に入門して一年ほど経った頃、閑市庵近くで火事があり私は師の安否を案じて一目散に駆けつけたが、草庵にはすでに火の粉が振りかかり今にも炎が燃え移らんとしていた。庵へ飛び込んでみると師は泰然として名残りの一服を喫せんと茶室を清め諸道具を飾り、私を見てにっこりとし点茶をすすめ自らも一服された。すでに天井に火が移っていたが、せきたてる私を制して師から譲られた百如釜只一つだけを持って、いざ参ろうかと外へ出られたのである。

私は師の胆力、非常の際に発揮される強い修業心に驚嘆し、馬術の極意を茶の道に見た思いであった。」

一掌は、出雲の地に来遊して茶の湯を教え、三斎流を伝えたのである。「茶是一味禅」の墨書が残されているが、落款に「於雲陽一掌書」とあり、これが出雲来遊の動かぬ証拠となっている。

荒井一掌書「茶是一味禅」

◆細川家と禅

歴代細川家と禅との関わりを証する記録は、残念ながら筆者のもとにはあまりない。出雲文化伝承館で永青文庫の館蔵品等の展示したものの中から若干紹介してみたい。

○沢庵宗彭（たくあんそうほう）

沢庵は、但馬出石の出身で京都大徳寺三玄院の春屋宗園のもとに参禅、大徳寺一五三世になった禅僧である。

紫衣事件で出羽国に配流されるが、のちにゆるされて江戸へ、将軍家光の帰衣が厚く品川の東海寺の開山となった。

沢庵は、細川幽斎公に和歌を学ぶが、忠興・忠利・光尚の三代の細川公は沢庵に禅の道を学んだという。沢庵は、和漢の教養に優れ能筆家で多くの墨跡が残されている。茶湯においても造詣が深く、「茶禅同一味」の著述が伝えられている。出雲文化伝承館で沢庵の法語の墨書を展示したことがあるが、実に力強い筆跡であった。

また、世間では沢庵漬の名で、よく知られている。

○青厳宗渭（せいがんそうい）

宗渭は、細川幽斎公の弟である玉甫和尚について得度、京都高桐院三世となり、のちに京都大徳寺一七〇世となった禅僧である。

細川家との関わりも深く、細川三斎公は宗渭のもとに参禅している。また、将軍家光から請われて沢庵の没後、東海寺住職となっている。出雲文化伝承館で展示した彼の墨書は、勢いのある潤筆そのもので、その禅風がよくうかがえるものであった。

○白隠と仙厓

細川護熙公は、高校と大学時代を祖父の護立公と永青文庫になっている東京目白台の別邸で同居していて、よく護立公のご相伴にあづかりましたと祖父の思い出話を語っておられる。

細川護立公は、若い時に白隠の「夜船閑話」を読んで感激し、自ら美濃や静岡周辺へ出かけて白隠の墨跡を十年間で千点程、蒐集されたという。白隠と併行して仙厓・一休という禅僧の作品も集めたが、特に白隠と仙厓が大好きで、いつも書斎の壁に架けて毎日のように架け替えて楽しんでいた。また、実際に座禅を組んでおられたとのことである。

白隠書「蓮池観音像」

次のような逸話も語られている。ある学者が、護立公と新橋の若い芸者が一緒に歩いているのを見て、あまり仲が良さそうだったので、冷やかしの手紙を送ったところ、返信があり只一行、「銀椀裏に雪を盛る」と書いてあった。意味が分からない学者は、大徳寺の長老に聞くと、「銀と雪は同一に見えるが本質は違う。二人の仲は同一に見えるが別物であるという意味だ。」と長老は答えた。禅問答のような話で護立公の粋な見識に学者は頭の下がる思いで、実に風流な殿様だなあと感動し、すぐ謝りの手紙を送ったという。

◆人間修業の茶

あくまでも茶の湯は茶湯であり禅の道は禅で本来は別のものであるが、両者を結び付ける共通のものがあって、はじめて茶禅一味といえる。単なる趣味や遊び、手先の点前だけの茶の湯であれば、禅と一味の茶とはいえない。

茶道の美の基本理念であるわびが、禅芸術の理念である幽玄・静寂等の美と統合されたものでなければならない。

茶の湯の求めるものが、禅道の厳しい修業の目指すものと等しく同じものであってこそ、茶の湯の道は禅の道に通じ、禅と一味不二となり、真の茶道となりうるのである。

人間修業の道という根本の精神から見れば、茶の湯と禅は「不二一如」であり、このような茶を私達は学びたいものである。

九曜会事業報告

〈平成二十六年七月～二十七年六月〉

○九曜会総会

平成二十六年七月十三日(日)
ホテル武志山荘
担当　役員、事業部、直門(薄茶席)

平成二十六年度総会が会員一〇二人の出席のもと盛大に開催された。

会長様、宗浦家元様のご挨拶に続いて二十五年度の事業及び決算報告、二十六年度の事業計画、予算書の審議が承認可決された。

薄茶席を直門が担当した。午後は田部美術館館長の田部真孝氏による「田部家の起源」と「茶の湯との関係」の演題で九代田部長右衛門氏（真孝氏の祖父）の偉大さと、島根の山林王としての所以など改めて田部家の歴史の重みを知る興味深いご講演に、しばし拍手が鳴り止まなかった。

2階和室薄茶席　担当直門

薄茶席　酥　松露亭筆

㈱田部　田部真孝氏

○出雲大社亀山茶会

平成二十六年九月十四日(日)
献茶式　午前十時より　於・本殿

宗浦家元の御献茶

【濃茶席】
北島國造館　奥書院
担当　杉山社中、佐藤社中
来客者数　一四二名

天気も良く蝉の声を聴きながらゆったりとした自然の中で席を担当することができました。

濃茶は練ることを練習してきたので来客の方からもお褒めの言葉をいただきました。

お菓子がとても好評でした。

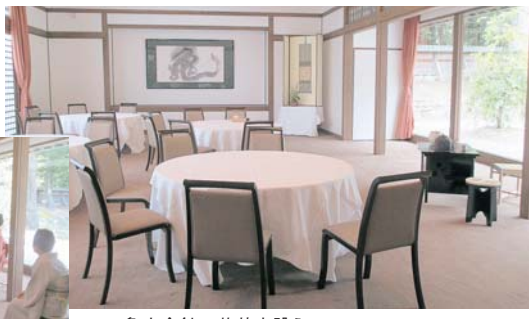
奥書院床

萬代を　かけずくずれぬいわがねを
ったいて落つる　雫の尾の瀧

東久世道禧公御筆

【薄茶席】
亀山会館
担当　山崎社中
来客者数　一九一名

好天に恵まれた第二十八回亀山茶会の薄茶席を担当させていただきました。前日は結婚式があり夕方六時半からの準備で少し焦りましたが、典子先生に遅くまでご指導いただき準備することができました。今回は円卓での設えを致しましたが、お寛ぎいただけましたでしょうか。お客様の前で初めてお点前をする若い社中もおりましたが、これを機に社中一同一層精進したいと思います。



亀山会館　薄茶席設え

一閑張　菊香合

○松江城大茶会

【薄茶席】
平成二十六年十月四日㈯・五日㈰
赤山茶道会館
担当　大平、大田、米子、安来、
　　隠岐、沼　各社中
四日　十一席
　　来客者数　二七七名
五日　十席
　　来客者数　二三九名

十月四、五日の城山茶会は久しぶりの担当でしたが、今年は場所が赤山茶道会館になり、二の丸の賑わいとは別に静かなしっとりとした場所で、遠い所へわざわざこちらを目当てに訪れてくださったお客様にありがたい気持ちで心を込めてお茶をお出ししました。五日は雨となりその点お部屋でのお茶会は助かりました。大勢で担当させていただき始めは一寸戸惑いましたが、すぐ慣れてなんとか二日間務めることができました。月にちなんだおもてなしもこの雨ではと思いましたが、夜はきれいに姿を見せ余韻に浸りながら疲れも忘れるようでした。受付の方々もありがとうございました。

巻頁一～三ページで紹介

○三斎公三七〇年遠忌　法要・献茶式並びに記念茶会

【法要・献茶式】
平成二十六年十一月十五日㈯
ニューウェルシティ出雲
銀河の間
【記念茶会】
平成二十六年十一月十六日㈰
ホテル武志山荘、観翠庵道場、
観音寺本堂・書院

○出雲和文化祭

【呈茶席】
平成二十六年十一月二十三日
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　下垣、山田、加儀社中
来客者数　三四七名

天候にも恵まれ、たくさんの皆様にご参加いただきました。今回は出雲大社千家国麿さま典子さまのご結婚をお祝いし、お席を祝賀の意を込めて設えました。

お茶会のあくる日が二か月になられるという赤ちゃん連れの御夫婦様、また一〇一才というおばあさまがお孫様とご一緒においでになりました。帰り際周りのたくさんの方々と握手をされ、来年も元気でいて来たいというお言葉が印象的でした。

寿　山田無文筆

○講習会

平成二十七年三月一日㈰
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　研修部（六名）
参加人数　八四名
午前　炉の平濃茶点前と客ぶり・道具拝見
午後　家元様による講義「焼き物について」

会員の要望に応え、今年度初め「炉の点前」研修と家元様に「焼き物について」講義をしていただきました。質問も多義にわたり活発な質疑応答がありました。

家元様が各種茶碗を持ち出され、特徴・見どころ等直接手に取りながらの講義で、会員皆興奮してお話を伺いました。参加者も多く、充実した講習会になりました。

○早春の茶会

【薄茶席】
平成二十七年三月二十九日㈰
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　杉原社中、今岡社中
来客者数　六〇八名

恒例の四流派合同での早春の茶会は、両日とも天候に恵まれ無事終えることができました。約六〇〇名のお客様をお迎えし、床の間に怡園公のお軸を掛け、宗浦家元の花入れに花を活け一服のお茶に心を込めておもてなしをしました。私たちお手伝いの者も一生懸命爽やかな早春の茶会を担当させて頂き感謝しています。お客様から「毎回三斎流のお席を楽しみにしております」と声をかけられ嬉しく思いました。改めて三斎流に誇りを持ち精進してまいりたいと思います。

○新樹の茶会

【濃茶席】
平成二十七年四月二十九日（水・祝）
観音寺書院　担当　辰村社中
来客者数　一八六名

正に新樹の茶会に相応しく緑爽やかな天気に恵まれ、多数の方々にご来席頂き、濃茶宗浦家元好松向の昔の深い味わいをご堪能頂けたのではと思っております。不束な席担当ではございましたが、皆様の温かいお支えにより無事終える事が出来ました。

【薄茶席】
観翠庵道場
担当　福間社中
来客者数　一八八名
外　呈茶席　八六名

久しぶりに新樹の茶会を担当させていただきました。青葉一色の道場でお天気にも恵まれ、予想以上に多くの方々に御来庵いただきました。富士の間は十八名で満席になる為、桑の小卓の点前を三十分で繰り出しできるよう点てだしや点前に工夫をして何とか全席三十分でできましたが、それでも大分待たれた方があったようでさらになにかの工夫が課題です。

○お堀端茶席

平成二十七年五月二日・三日・四日
堀川川床茶席　薄茶席
担当　大田・米子・安来社中
来客数　二日一〇六名・三日一三〇名・四日一一三名

大型連休の中、お堀端茶会が行われ、三斎流は五月二日、三日、四日と担当しました。堀川の上に茶席を設け、遊覧船のいきかう中、手をふったり、船頭さんの歌や案内が聞こえ、お客様もリラックスしてお茶を楽しまれました。

お堀端川床茶席

○出雲大社大茶会

平成二十七年五月十五日㈮・十六日㈯
おくにがえり会館
担当　伊藤社中、加茂会、野々村社中
十五日　来客者数　四八九名
十六日　来客者数　五一七名

会場の設営を初めて正面に床と点前席を作ったことが室内の印象を大変良くしたように感じました。まず、正面に床が見える、遅れて入席されても他のお客様に気づかれることなく点前が進んだこと、廊下などの雑音が聞こえにくかったことなどがその理由です。

落ち着いた穏やかな本当に良い席だったと口々に受付に声をかけてくださったと聞き、担当者としてこんなにうれしいことはありません。

しかし、待ち時間があまりなく入室していただいたが、ごく少数の方から〝待った〟と不満を述べられた方があったのが残念でした。対応の仕方があったのではないかと反省しました。

おくにがえり会館 すっきりとした設えの薄茶席

編集後記

例年総会に配布するために四苦八苦しております。内容的にも只行事を追っているだけでなく、余裕をもって充実した紙面づくりに取り組んで参りたいと存じますので、皆様のご指導ご協力をお願い申し上げます。

拙い紙面になりましたがお許し下さいませ。

広報部担当